

平成28年度 第1回 槻の木高等学校 学校協議会 記録

<開催日時>平成28年7月16日(土) 16:00~18:00

<開催場所>槻の木高校応接室

<出席者>

[委員] 北山茂治 委員、木村 勝 委員、芝井敬司 委員、田中隆夫 委員、
宮坂政宏 委員

[学校] 竹下健治 校長、奥谷彰男 教頭、河嶋憲治 事務長
山本 尚 首席、田中 眞 首席、奥本雅俊 指導教諭、藤田 稔 教諭

1. 委員委嘱(竹下校長)

2. 委員紹介(竹下校長)

3. 事務局紹介(奥谷教頭)

4. 校長挨拶(竹下校長)

5. 座長選出

木村PTA会長に選出 座長挨拶

<話題提供1 平成29年度 教科書採択>

(別紙)をもとに説明(竹下校長)

<話題提供2 平成28年 入試・新入生の状況(山本尚首席)>

(別紙)をもとに説明(山本首席)

北山委員

アドミッションポリシーに対する自己申告書の書き方については、どの高校に対しても時間をかけて丁寧に指導を行っている。本当に中学校では大変な労力をさいて指導している。槻の木高校は具体的な内容のアドミッションポリシーなので、それなりに槻の木高校らしい文章になる。他校はわりとざっくりとした内容のアドミッションポリシーなので、作成していくと似たようなものになってしまう。だから槻の木を受験しようと考えている生徒は具体的な言葉で「高校では〇〇で頑張る」という強い気持ちを自己申告書に記載しています。

芝井委員

アドミッションポリシーの④の項目は来年から入れるのか?もし可能なら「語学」は使ってはいけない言葉である。「外国語応用能力」や「外国語の力」というのは良いのだが、「語学」というのは仲間うちの言葉である。「外国語学習」や「外国語能力」あるい

は「外国語能力向上研修」などのほうが良い。一般的に使ってしまっているが、本来はあまり良い言い方ではない。もし可能であれば、社会でもこれだけ使われているが考えていただけたら。

竹下校長

世間でそのように誤解されているようであれば直していく方向で進めていく。

芝井委員

「海外研修」にするか「海外での外国語研修」などが本当は良いのであろうと思う。

<話題提供3 槻の木 NEXT STAGE について(山本尚首席)>

(別紙)をもとに説明(山本首席)

芝井委員

大変面白いと思うが、大学の入試が変わるので、現実的なことを言うと、今までの槻の木のやってこられた、日常をしっかりと取り組み勉強して、そして試験で実力を発揮するというやり方だけでは思わしい結果が出ない可能性がある試験に変わって行くだろう。それからこのような取り組みですごく大事なものは、伝わったものを教えこんでいき、きちっと消化して、しっかりと身につくとともに、最終的には進学結果につながってくると思う。それが目的でやるのではないであらうが、現実問題として2020年以降の大学入試に早くに対応して行く必要があり、国公立の入り口の制度が変わるという従来よりは点数だけでの評価というのが大変小さくなっていく。そういう意味ではすごく良い時期にされる良い取り組み。それも基礎的な学力なしでは意味がないので、基礎学力をつけた上でそういう力を個人が自学的につけて行くようなそういう問題をこなしていけるような良い取り組みである。もう一つ何のために生きるのか?と考えることが大事である。というのはよく進路実現や自己実現という個人の夢を実現しましょうとか、良い職業に就けたらいいですねという、そちらのほうに話を持っていくというのはあまり好きではない。その職業に就くなり進路実現していったい何をするのかということを追いかけて欲しい。個人の幸せだけに結びつけるのではなく、社会に対するまなざし、皆で生きているということを実感して生きていけるかということである。極めて大げさに言えば個人の生き方の倫理性をうえつける。実際のなかで身につけていくものだと思う。社会がきちんと回っていると、健全性を保っているか?単にひとりひとりの個人だけがやっている訳ではない。全体的に助け合ったり、お互いに察しながら生きていったり、全体の中での自主性を含めて、自分は何のために生きているのかを考えながら力をつけていく。そういうことを高校の時に与えていく必要がある。そこに焦点をあてるような取り組みをしていただきたい。単なる自分の「～になりたい」という夢じゃなくて、もう少し大きな志を持たせるような教育・取り組みを考えて欲しい。あるいは自分が犠牲になってもリーダーシップを発揮できるようなリーダーを槻の木から出して欲しい。

木村会長

芝井先生のおしゃった話や卒業式の話とかぶるが、どういう人になりたいのか?とい

うことを自分の社員や子供にも聞く。人の幸せとはいったい何なのか？自分だけお金持ちになって、周りにお金がなくてそれが幸せなのだろうか？など色々なことを問いかけて考えさせる。こういう企業訪問や学校訪問などをして違う外の世界を見せるときに、私がいつも思うのは色々な層が現実にあって、やる気があって能力もあって技術や知識があつてガンガン引っ張っていくような層もあれば、そこまで至らない層もあり、いっぽう流され諦めてしまっている層が一番多く、皆さんご存知のとおりピラミッド型の下の層が最も大きくなっております。意識の低い大きい層を底上げしていかないと社会が回っていかない。底上げをするために若い年代の子供たちに、熱いものというか、目を覚ますきっかけになるような人物を見せて欲しいし、そういう人の話を聞かせて欲しい。その人物はどの職種でも良い。どのようなことをして自分は世の中に貢献するのか、人を幸せにしたいと考えるのか？その方法は何通りもあり、自分が一番得意な方法を見つけて社会に貢献して欲しい。そういう自分の人間としてのポリシーを見つけてもらうきっかけになれば、色々な企業を見聞きしたり、いろいろな人に会う事はとてもいいことである。そういう人は時間で働いているのではなく、世の中のために真剣にやっている。給料をもらうためを超え仕事をやっている情熱ある人を見せることで、目を覚まして欲しい。なぜ勉強しないといけないのかというのは、そういうステージに立つためには最低限そのレベルまで行かないと出来ない事が多い為である。そのために勉強するのであって、勉強が好きだからしているのでもない。人の役に立とうと思えば、それなりのことを言えるようになる必要があり、だから学力がいる。そういうことが分かっているなければ、先生や親に勉強しろといわれても、勉強できるわけがない。とても良い取り組みなので、寝ていた子がパチンと眼を覚ますようなきっかけになればと思います。

山本首席

去年の2月に実施した「後輩たちへのメッセージ」で本校の卒業生が全校生徒を前に40分位のプレゼンをしてくれた。そのときの生徒の反応を見ていたらまさにハッとしていて、そこで質問がたくさん出てきていた。我々の予想をはるかに生徒たちは超えていて、それはOBが覚ましてくれたのかも知れないが、おそらく生徒たちが感じているのは、本校の生徒たちの様々な質問を見事に捌いていた。その見事さも感じたのではない。本校の生徒の質問もそうであるし、OBもそうであるし、我々も火をつけられた。我々の想定していたところより、意識は高いところに生徒は行っていて、機は熟したと感じる。

木村会長

私が思うに、とても勉強ができる生徒と、とても足が速い生徒は同列だと思っている。とても面白い生徒も同様だ。どのような能力でも優れていれば、必ず世の中の役に立つ事が出来る。学力はさほど高いレベルじゃなくても何か生きるパワーを持っていたり、そういう子供たちが「俺も世の中に出て役に立てる」と希望を持てるようなものを入れてもらえたらと思う。世の中に出ればいくらでも逆転のチャンスもあるのに、諦め気味の生徒たちがいるので、勉強が優秀な生徒たちだけでなく、そういう子たちがパチンと眼を覚ますような取り組みを考えてもらえたらと思います。

竹下校長

大学入試制度も様々な力を試すような形になっている。学年室長の藤田先生から生徒の話聞いて危機感を感じている。うちの生徒は真面目でコツコツできるけれども、そういうところで戦った時に果たしてどうなるのか？だから外の風に当たらせる。一緒にテーマを考えてというのではなく、一度勇気を持って外に出てみる。今まで敷居が高かったところへ行ってみる。それが大事だと思う。そうすることで「自分の力が覚醒してくる」「新たな力を見出していく」というイメージでNEXT STAGEを考えている。

芝井委員

大学だけでなく世間一般で困っている事は内向き思考が強くなっている。昔であれば日本を飛び出してみることが、学生のなかで一般的にあったが、最近はなるべくそういう風にならないようにと内向きになっている。外へ上手く連れて行くと靦面に変わる。フィリピンに行ったり、カンボジアに行ったりして学校を作る作業をボランティアで手伝わせるなどしたら、帰ってくると全く顔つきが変わる。親は危険というが、学生は賢明なので、めちゃくちゃな事はしませんし、しっかりとした情報を出して、安全を担保しながら実施すると顔つきまで変わりますし、何のために勉強するのかということが分かるようになる。大学の中だけで生活すると「講義を受ける」「単位を取る」というレベルになってしまう。そこで大過なくやったからといって意欲というのは出来ない。とても良い社会なのでハングリー精神を持つことも出来ない。一方外に出ると、広い国家とか、政治的なことなど、しんどいなかで生きている人々が地球の中にはいるなどを知ることができるので刺激が大きく考える機会ができる。是非ともそういう機会を。語弊があるといけませんが、大人たちが行きたがるような良い所へ連れて行くのはやめた方がよい。異文化接触という意味では悪いことではないが、本当に物事を真剣に考える機会にするためには行き先を考えることが大切である。

宮坂委員

大学の入試が変わるとするのは高校指導要領の改定と連動している。指導要領の改訂のなかで学力の3要素の3つ目「意欲を持って主体的に学習できるようにする」というのがあがるが、今回の話はそういったところとも連動しているのではないかな？もちろん1つ目、2つ目とも連動するのであろうが。大学入試だけを考えているわけではないでしょうが、ひとつそういったところを留意してもらったらどうか。また、これからの時代を生きていくために何が大切なのかを考える。それを考える時に来ている、一番大切なのは自分の内面に何をもちつのか？ということであり、内面に何をもちつのかということには段階があり、まず実感しないとイケない。実感だけで終わってしまうとそれはただのイベントになってしまうので、次に自分の生き方に融合させて納得して物事に取り組む、「納得」というのが伴ってこなければいけない。次に自分は生きていくにあたって、学んでいくにあたって、本音で考えて「内面化」させることで自分のパーソナリティになっていく。そういった段階が必要になってくる。「発達段階」や「学習が深まっていく」内面化にいたる段階を踏まえていないプログラムは失敗する。自分で実感して内面化させる生徒もいるが、学校という公教育の場であるので内面化に至るようプログラム化・カリキュラム化していただきたい。もうひとつは「なぜこのプログラムなのか？」とい

うこと。実感、納得、本音そして内面化していくプログラムとして、なぜこのプログラムを選んだのか？授業の中で行ってもいいのではないのか？他の学校行事の中で行ってもいいのではないのか？いろんなことを実感して自分の人生を切り開いていく機会はたくさんあるのではないのか。たまたま『後輩たちへのメッセージ』で先輩の話を聞いて自分が実感して、たまたま共感した。だけどそれが授業のなかで先生が言った一言のなかで、たまたま共感することがあるかもしれない。なぜその行事なのか？なぜそこなのか？ということを生徒に内面化にいたるプロセスを出来るだけ与えやすいような機会というのを選択してあげるのがいいのではないのか。もうひとつは、実感するためには FIRST STAGE で作られた高校入学までに培ってきた人生なり学んできたもの、自分を構成してきたもの、自分の内面に構築してきたものがある。それと上手くシンクロさせるから実感したり、感動したりすることが出来る。それを育てていないと「面白かった」で終わってしまう。深くシンクロさせるためにはそれまでに FIRST STAGE の部分がとても大切で、「違うステージに行くのだから次のステージだけで良いのだ」ではなくて、今までの FIRST STAGE の何が NEXT STAGE とシンクロさせるものがあったのか？そこをもう一度分析して「なにが NEXT STAGE に至るための成果であったのか」「子供たちに内面化させるものであったのか」ということを考えたうえでやっていただくことによって榎の木は日本一の学校になると思います。FIRST STAGE の分析も考えていただきたい。社会に出る時に必要な素養を備えるには最高の高校と書いてありますから「これって、一体なんだったのか？」とならないよう、今までのベースの部分「子供たちに何を構築させてきたのか」という部分と高榎の小中学校で構築されてきた部分を踏まえて考えると、この NEXT STAGE にむけて、良い取り組みになるのでは？

北山委員

私が思っているのは、中学校の教師でどういう先生が生徒や保護者や社会にとって良い先生なのか？と考えていると、学歴は関係ないと思います。小学校の先生、中学校の先生、高校の先生それぞれ必要な資質は異なるが、資質を磨いていくのにはもちろん一定の学力が必要であるが、それと同時に様々な経験を積みあげている教師でないと、子供たちの気持ち、親の気持ち、委員会の考え、文科省の考えは分からない。そのうえで子供たちが幸せになっていくような教育をしていくというのは本当に難しい。小中学校で行っている様々な体験学習を通して、次のステージにつながる多くの経験をさせてあげるということは非常に良いことだと思う。榎の木の卒業生が社会に貢献できるということも大事であり、また貢献している人たちのリーダーになるようになることが、生徒たちにとって大事なことである。このような取り組みが前に進んでいくべきだと感じる。自分自身も教員をしながら日々たくさんの経験をしながら、また新しい先生が来られる中でどのような指導をすればいいのかはなかなか難しい。個々の力を伸ばしてやるためには小中高のなかで色んな体験が出来る環境を作ってあげることが大切である。

田中委員

今、お話を聞かせていただいて NEXT STAGE は非常に良いと思います。特に学校報告の中に「必要な素養」と書いてありますが、素養というのは伝統芸能では非常に厳しく問われるものであります。礼儀作法、知性・教養・嗜み・立ち居振る舞い等々、常か

ら厳しく言われます。

生徒が企業や大学を訪問した際、まず始めに挨拶があるのが当然であるが、その挨拶がきちりと出来るのか？物事の始まりはしっかりと挨拶をすることから。という意味では FIRST STAGE の日常、普段の生活が一番大事なものになります。それを維持していくというのは並大抵のものではない。我々でも朝起きて寝るまでの日常の時間、目的を持ち規範通りに出来るかと言いますとなかなかそうも出来ない。これらを実践・実行すると言うことが一番大事である。こちらの学校の特色としまして、時間を守る・挨拶をする・身だしなみを整える、この当たり前のことを、一生懸命されていて、子供たちが実行しているというのが非常に素晴らしい。

取り組み内容を見せていただいて、私がここで何が出来るかと考えると、8番目の文化交流で力になれるのでは？先日、我が家に能の世界を全く知らない成人の方14人がいらっしゃったのですが、最初に袴をつけて謡い・仕舞を披露させていただきましたが、それだけで驚き感動されていました。素晴らしい日本の伝統文化を知らないことは、日本人として恥かしいものであり、知性教養の部分としても損失ではないでしょうか。

実は娘がニュージーランドマッセイ大学に4年、卒業後は琉球大学大学院へ進み、その後アメリカ人と結婚、現在日本に在住していますが、マッセイ大学時代「日本の文化は何か？」と聞かれたときに上手く答えられなかった。逆に私の家の舞台に海外から留学生や国際ボランティアの方々が来られることがよくあります。過去に十数カ国の方が来られました。我が家で色々な日本文化を体験していただきました。能楽の舞いや、能面体験、茶華道、などを経験し、大変喜んでくれました。ただ、その際に驚いたことに日本に来る前に多くの日本の文化を勉強してくる。また、自国の伝統文化や歴史を全て説明できる。さらに、訪れる国の文化も勉強してくる。例えば、日本の三大古典芸能は何か？という質問に答えることが出来る。①能狂言②文楽③歌舞伎になるのですが、それらを正確にイタリアやトルコ・フランスの子達が答えてくれる。それが非常に嬉しかった。これからはオーストラリアを含め留学する際に、本校の進めるネクストステージを十二分に活用し、「素養（知性・教養・品格・）」の向上に更に取り組んでもらいたい。人としての社会性やモラルをしっかり身につけ、将来素晴らしい人格者となるための糧となればと思います。

宮坂委員

NEXT STAGE で他に考えていることはあるのか。たとえば授業、行事などを目標に向けて悪い部分を変えていき得意な部分を深くしていくようなことはあるのか？新しい時代を生きていく子供たちなのだから、付け加えていく部分を考えるなど学校教育活動全般にわたって、どのように考えているのか。

山本首席

本校の教育は合言葉が先にあって、後からついてくるというような、「この教育活動はここに入るな」というようなことである。後先逆になるが、こちらの意識で持っていくことが出来る。清掃ボランティアや家庭科の授業の保育所交流などのひとつの授業の中の一形態がこの教育の3つ目の柱があることによって肉付けされたものになってくる。その取り組みが学校教育の三本の柱のどこに位置づけられるのかが分かる。そのために

骨格を作ろうとしている。この教育活動が5年後10年後の子供たちのためになっている。その教育活動がどこに行き先があるのかということが教育者のほうに見えてくるようになりやすい。「受験は団体戦」という言葉を通じて、皆でやるという空気を作らないと実績は上がらないということで、「これも団体戦だな」と実は進学実績につながってくる。そういうことを含めて、「今までやっている教育活動が色んなところで活きているんだ」と分かるようになる。ただ単に支援学校などと交流し、決まった日程や定期的にやるだけではなく、そこに意味が入ってくるような活動を。

宮坂委員

いろいろな学校を見ていて傾向として「教育に無駄は必要」と言われるが、実際には「必要」と言って本当に無駄なことをしていることが多い。その子の10年後に向けて本当に必要なのかというような事で。例えば関西大学に行って何を心得て帰ってくるのか？自分自身が内面化したことを他の生徒に共有化できるか？ということが大切だ。そうしないと良い学校の伝統になっていかない。次の世代にさらにブラッシュアップされて、良いプログラムになっていく。そうしないと先生たちも効果が分からない。そうするといいものになるのでは。それと出会いのなかで大切なのは外との出会いと同時に自分の内側との出会いが大切で、内側をどれだけ耕していけるのか。自分との出会いというのは、単に「良かったな」で終わるのではなく、自分で主体的に考える場を持つということ。自分との対話ができるような部分が大切になっていく。ディープラーニングのひとつの要素になっていくのでは。アクティブラーニングよりもディープラーニングの方が大切なのではないかと思うが、このNEXT STAGEはディープラーニングにもつながっていき根幹になっていくのでは。

芝井委員

大学だと従前の授業とは異なり、起業家教育を行っている。日本で行っているところは多くはないが、アメリカなどではやっている。社会に上手く参加させるシステムを持っている。そうすると教室のなかで勉強する普段と違う経験を仲間ですることができる。大学ではほかにビジネスコンペみたいな事もやっていて、小学生の子供たちと一緒にやっている。高校生向けのビジネスコンペもやっている。そういうものをひとつ、いくつか調べていくと色々なところで色々やっているのが分かる。それで10年20年後の彼らの生き方とマッチするに違いないと思われるものをピックアップして付け加えると面白いものになるのでは。

山本首席

学校の中に位置づける時に、我々は内容もそうだけど、労働力であり誰がそれをやるのか？ということになる。それを育てないといけない。その第一歩の教育である。だから教員教師にその風を見せてやりたい。「大学って今はこんな事もやっているんだ」というような。立命館の先生に起業を目指すものもあるとお聞きした。それは大学の先生と繋がったからそういう情報を得ることが出来た。我々教員が生徒に社会のことについて話す、引き出しを作ることが出来る。それも含めて「この仕事は私がやりましょうか？」というような、任せられる人が出てこないで学校のなかで続かない。

宮坂委員

先生方のほうで研究をきっちり行って子供たちにどのような力をつけたいと思うか。そういう部分が必要である。

山本首席

先生がこれに興味を持ってもらわないという事になる。伊藤忠や大阪ガスの本社ビルに伺うのは面白そうだと思う。大学についても、大学が企画している大学説明会に入るのではなく、研究室の中に入らせてもらえるというのは、それは違うと思う。そこをくすぐりたい。それがないと労働力が枯渇する。良い活動していても継続していかない。

北山委員

誰がそれを担うのか？それを経験している世代かどうかで、方向性はぜんぜん違ってくる。

宮坂委員

先生方が知らなかったら機会を与えることも出来ない。経験した子供がこれを経験して大学に入ったり、企業に入ったりして次に手伝ってくれるのではないか。そういうことも教育の資源として活用していけば。もちろんPTAや中学校も全面的に支援してくれるのでは？自分たちもやらないと子供たちのためにならないという事は、しんどくてもやっていただいて、そうではない場合は出来る限り外の教育資源を活用していく。あるいは教育資源を育成していく。

芝井委員

ある教育学の先生が、これから高校に必要なのは外部リリースをどれだけマネジメントできるか？ということがすごく大事になってくる。それが出来ているところはとても良い教育が出来ている。それが出来ていないと表面上は問題があるようには見えないが、文化祭をどうするやテストでどうするという議論で終わってしまう。学校生活では良い子なんだけど社会に出た時に挫折を繰り返すことで、外で接点を持つことで、出来るかということが分かるようになる。

宮坂委員

先生方の仕事はしんどいと思うが、質の高いしんどさと質の悪いしんどさとを学校の先生は経験してきておられるとは思いますが、質の高いしんどさを。

竹下校長

本校の先生方は結構やっています。企業訪問と研究室訪問とやったのは、自分として出来ることを出来ることを広げて行って、教員集団におろしていく。教員集団には出来る範囲のなかで関わって行って貰って、無理は出来ないと考えている。

木村会長

これだけのことをやっている府立高校ってあるんですか？

宮坂委員

形の上でやっているところはあります。

竹下校長

前の学校でもやっていましたが、これだけ充実したものはなかなか出来ない。

木村会長

実質的に先生たちのいる時間とか高校生の使える時間帯を考えると相当厳しい。とて

も大変だろうと思う。準備していく先生も大変ですけど、経験していく生徒も時間をさかないといけないので大変。PTAとしては全面的に協力していく。

宮坂委員

募集人員の20名は他のカリキュラムと重複していいのか？

山本首席

3・4つをパッケージにしていくので、同じパッケージの中ではダメ。60~80人の希望者が出てきたら良い。それを1・2ヶ月に1回行っていきたい。

宮坂委員

確かに11の分野でA~Cまであるのでたくさん数がある。

山本首席

20人位がちょうどいいと思う。いろんな方がおっしゃる。それは大学の研究室の先生方も「20人位だったら受け入れる」と。それが30~50人になるとずいぶん違う。

木村会長

人数が増えると緊張感が薄れる。

北山委員

全学年を対象とするのか？

山本首席

一応、全学年を対象とするが上級生を優先するかは分からない。大学にこちらの内容が伝わればウェルカムだと思う。そういう状況であるから仕事はやりやすい。「喜んでもらえてるんだ」となると、そんなに疲れない。こちらの狙いや意図が伝えられたら、大学側からすぐに良い物が出てきます。

宮坂委員

大学も企業も後継者問題が大きい。大学の先生と話をしても、世界と戦っていかなければいけないので、そのときに意欲を持って「偏差値高いから」「たくさん勉強したから」はいらない。やはり素養。研究者は研究者としての素養を持った意識の高い人が、目的意識を持って来て欲しいという事だ。

芝井委員

アジアを中心に海外から来る留学生は根気強い。理系の大学院の研究室は国公立も含めほとんど日本人がいなくなっている。経済的なことも確かにあるが必死である。日本人でもハングリーなのは時々いますが、本当に学ぶことが楽しいんだと思わなければ海外からの留学生に負けてしまう。

木村会長

どうしても全ての物が揃っているから余計に難しい。日本でも昔は、地方から就職で出て来る者は子供の頃から「高校を卒業したら都会に働きに出る」と決めている事が多かった。これと状況はまったく一緒ではないか。海外の学生は日本の大学に行って、日本の企業に就職することが家族の夢ではなくて親族の夢である。それを見ていると必死さがまったく違う。日本のこの恵まれた環境で育てている子達に同じようにやれと言っても無理。ハングリーなところへ行ったら刺激を受けたほうが良い。自分は日本人として世界に何が貢献できるか？と思えば海外から日本を見なければいけない。将来のことを

考えると日本人が日本人として民度を落としてほしくない。せっかく日本人としての親切さや優しさを活かして世界に貢献して欲しい。冷静に外から日本を見ようとすれば海外留学生の友達を作るとするのは良い事だ。

〈提言〉

北山委員

新しい取り組み、こういう取り組みが大切。これからの日本を支えていく生徒たちの内在している資質を見出してあげる取り組みを考えていって頂けたらと思います。槻の木高校を希望する生徒は勉強を頑張りたい生徒が多いので今後ともよろしくお願ひします。

芝井委員

今日の話をお聞きして、先日問い合わせのあった関西大学研究室訪問の意図が理解できました。(笑) 提言に関しては先ほどから述べさせていただいた通りです。

木村会長

NEXT STAGE、FIRST STAGE アドミッションポリシーの①が一番大きい。土台を大切にしてもらいたい。

田中委員

勉強させていただきました。

宮坂委員

校門を入ると昨日の遅刻数が掲示している。各学年の「0」と学校全体の「0」の4つの「0」が並んでいる。生徒が端然と整然と動いているのを見て「あー槻の木高校だなあ」と感じる。そういう良さを深めて高めていただきたい。大学入試が変わるが入試センターの関係者が「計れないものは計れない」と言っている。それは大学入試には出せません。あくまでも大学入試で計れるのは知識・理解とB問題までだ。あとは個別の大学で計ること。統一テストは出来ないので第一関門をクリアしようと思えば、今までの部分が大切である。そこをベースにするのが大切で、そのうえでプラスアルファでおそらく大学も規律正しく、規範意識の高くチャレンジングな精神を持っていて、ある程度の学力があれば、面接であろうが何であろうが多分クリアできる。将来を自分の口で語れたり、そういう風に出来たら多分大学・社会は評価してくれると思うので、ベースの部分をきっちりしていただきたい。人間がしっかりしているということが重要だ。